別紙様式２

# 令和６年度 学校関係者評価報告書(第１次) №1

評価点

| 自己評価 | | 学校関係者評価 | |
|---|---|---|---|
| A | 高いレベルで達成できた | A | とても適切である |
| B | 達成できた | B | 概ね適切である |
| C | 一部達成できなかった | C | あまり適切でない |
| D | ほとんど達成できなかった | D | 適切でない |
| | | E | 判定できない |

学校(園)名： 広島大学附属小学校

| 分野 | 重点目標<br>(評価項目) | 年度計画(中期計画・中期目標)との関連性 | 具体的方策 | 成果指標・判断基準 | 自己評価<br>達成状況，改善策 | 評価 | 学校関係者評価<br>意 見・理 由 | 評価 | 学校関係者評価を踏まえた改善策 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 教育課程・学習指導等 | 1児童に基礎的・基本的な学力を身につけさせるとともに。 | 各学校園の特色や伝統を継続する。 | 教科担任制による専門性を活かした指導 | ・全国学力・学習状況調査における国語・算数の学校平均正答率:85%以上<br>・同質問紙調査の関連項目でのプラスの回答率:80%以上 | ・国語と算数の平均正答率<br>国語88(67.8)，算数91(63.6)<br>※括弧内の数字は全国<br>・国語／算数の授業で学習したことは将来，社会に出た時に役立つと思うか(「そう思う」＋「どちらかと言えばそう思う)。国語:93.6%，算数:96.7% | A | ・教科担任制は，より深い知識を身に付けることができている。<br>・先生方の教え方が興味を引く内容になっているため，苦手な教科でも楽しんで学んでいる。<br>・通塾していない子が普段の授業が受け入れられているのか気になる。<br>・どこまでが教科担任制の効果なのか見えづらい。 | A | ・全国学力・学習状況調査の結果を全国平均と比較するのみでなく，本校で実施する定着度テスト(年3回)を成果指標として判断基準を設けるなど，児童の学力をより適格に把握する。<br>・コンテンツとともに，コンピテンシーベースの授業展開を促進し，一人一人の児童の学習状況にあった指導と評価を行う。 |
| | 2. 自治的活動により、他者を思いやる心を育てる。 | 各学校園の特色や伝統を継続する。 | 委員会活動の活性化 | ・全国学力・学習状況調査の質問紙調査関連項目でのプラスの回答率:80%以上<br>・委員会活動の活動計画および実施状況 | ・人の役に立つ人間になりたいと思うか(「そう思う」＋「どちらかと言えばそう思う)。98.4%<br>・地域や社会をよくするために何かしてみたいか(「そう思う」＋「どちらかと言えばそう思う)。83.9%<br>・前期委員会活動は計画通り終了<br>・後期委員会活動も計画通り終了予定 | A | ・他学年の子と協力し合って登下校や委員会活動ができている。・縦割り活動を通して，自分の与えられた活動において責任感を持って行動していた。<br>・人の役に立つことが，勉強ができることと必ずしも結びつかないことも，子供たちに理解してほしい。<br>・教育のプロから倫理，心の豊かさ，強さを育んでほしい。 | B | ・平和教育を基軸とした教育の促進を通して，思いやりの心，他者を尊重する態度を育む。・地域や社会から広くゲストティーチャーを招き，色々な人とのかかわりの中で学ぶ機会をもつ。<br>・清掃活動やボランティア活動の充実によって，勤労の尊さや社会奉仕の精神を養う。 |
| | 3. ESDの推進 | 教育課題への対応(ESDの推進) | 教科の学習および総合的な学習の時間における取り組み | 学習の内容及び編成されたカリキュラム | 平和教育やジェンダー平等の取り組みを積極的に行った。研究部を中心にカリキュラムの編成作業が進められている。 | A | ・長崎研修旅行の取組は，附属学校ならでは，広島ならではの交流ができている。<br>・平和やジェンダーに対して，子供たちがどの程度深く理解し，自分で考えているのかを突き詰めてほしい。 | A | ・研修旅行，総合的な学習の時間を通した長崎大学附属小との児童交流を充実・発展させる。<br>・多様性に配慮して制服や体操服などを見直しを図るとともに，学校生活の決まりに係る規定についても検討する。 |
| 教育研究等 | 4. 大学や他附属との連携を通して，各教科の新しい指導方法を開発する。 | ・大学と附属の共同研究の推進<br>・附属学校間の交流の推進 | 学部附属および他附属との共同による授業研究の実施 | 大学および他附属教員参加の研究授業の実施 | ・2月の研究発表協議会では，大学教員参加の授業研究を全教科で行った。<br>・研究授業の相互参観や教科別の交流会の実施など，附属中・高等学校との連携が着実に強化されている。 | A | ・附属中高との交流が深まることは，とても良いことである。<br>・附属中高との連携は，引き続き強化していただきたい。 | A | ・附属中高のユネスコ班につながる小学校の児童会組織を検討する。<br>・互いの研究部が合同で連携について協議する場を設け，研究に関する新しい企画・実施を進める。 |
| | 5. 教育研究の成果を複数の方法で公開する。 | 教育研究の成果を発信する。 | ・季刊誌『学校教育』の発行<br>・研究紀要の刊行，リポジトリへの登録<br>・研究大会の開催 | ・季刊誌の発行:年4回<br>・研究紀要の刊行:年1回，リポジトリへの登録<br>・研究大会の開催:年1回<br>参加者数:500名以上 | ・『学校教育』は春，夏，秋，冬号を予定通り刊行<br>・研究紀要の刊行と機関リポジトリへの登録済<br>・研究大会を2月7日，8日に開催(参加者数657名，前年度548名) | A | ・目標数値を大幅にクリアしており，十分に達成している。<br>・研究会をより活性化するためには，参加者1000名程度を目指したい。<br>・力を入れすぎではないか，年2回の刊行でよい，先生の負担を減らして子供に向き合う時間を増やしてほしい。 | A | ・公開研究大会案内の範囲や時期について検討するとともに，広島市立小学校の校長に加えて，教員1名を招待する方向で検討する。<br>・学校教育誌の刊行を年4回として3年目となる本年度は，教職員の負担を含めたリサーチを行い，今後の方向性を抜本的に探る。 |
| | 6. 他校や他研究機関からの授業観察やアクションリサーチ等を受け入れる。 | 研究開発等の成果を教育モデルとして示すとともに，実践的な実習・研修の場を提供する。 | 授業観察やアクションリサーチ等の受け入れ | 授業観察，学校訪問等の受け入れ件数:年間5件以上 | ○広島大学からの依頼によるバングラデシュ、ブルキナファソ、エチオピア等の現職教員による学校訪問(年間5回)，ならびにアクションリサーチ(5名，前年度は2名)を受け入れた。 | B | ・異文化に触れることは児童にとっても良い，積極的に受け入れてほしい。・受け入れにも大変な準備と後処理があるから，年間5件で充分である。<br>・なぜBなのか明確ではないが，件数を増やすのであれば改善策が望まれる。 | B | ・国内外からの学校訪問，大学からのアクションリサーチなど，教育活動に支障のない限り，積極的に受け入れる。 |
| 社会連携・社会貢献活動等 | 7. 教科担任制を活かした学部および大学院の教育実習を実施する。 | 学部・研究科等と連携し，実践的な実習・研修の場を提供する。 | ・教科担任と学級担任による実習指導<br>・アンケートの実施による効果の検証 | ・教育実習生アンケートでの「とても満足」の回答者割合:90%以上 | ○教育実習全体に関して「とても満足」が93.1%<br>○教員になるための学びになったと回答したものが93.1%<br>○時間の使い方を考える習慣ができたと回答したもの(よくできた，ややできた)が100% | A | ・子どもたちも実習生が来て楽しんでおり，実習生も満足できているなら，とても良いことである。<br>・若い先生を身近に感じて，子どもたちにとって，良い時間になっている。<br>・満足度が高いのでこのレベルを保ってほしい。<br>・教育実習生の全体数等を知りたい。 | A | ・児童のとっても，教育実習の機会がキャリア教育の一助となるよう，意図的・計画的に取り組む。<br>・実習生の教職に対する肯定的な理解を促進し，将来の職業として自覚できるよう一層きめ細やかな指導を行う。 |
| | 8. 本校教員の講師派遣を促進する。 | 先導的な教育モデルを開発し，その成果を全国あるいは地域に展開する。 | 県内外校内研や研修会への教員の派遣 | 講師派遣依頼の件数:年間10件以上 | ○2月の全国協議会には県内および全国からの参加者があり，広域型の社会貢献を果たすことができた。<br>○講師派遣依頼の件数は計46件となっている。(前年度は23件) | A | ・算数科をはじめ理科も講師派遣依頼が増えているのはよいことである。<br>・忙しいのに，社会貢献までして大変なことだと思う。<br>・講師派遣の依頼がある教員に対して，インセンティブはあるのか。 | A | ・講師派遣依頼の多い算数科の実態から，そのノウハウを学ぶことによって，他教科でも派遣講師依頼の増加を図る。 |

注） ［　　］太枠内は，学校関係者評価委員会が記入する。

別紙様式 2

# 令和6年度 学校関係者評価報告書(第1次) №2

評価点

| 自己評価 | | 学校関係者評価 | |
|---|---|---|---|
| A | 高いレベルで達成できた | A | とても適切である |
| B | 達成できた | B | 概ね適切である |
| C | 一部達成できなかった | C | あまり適切でない |
| D | ほとんど達成できなかった | D | 適切でない |
| | | E | 判定できない |

学校(園)名: 広島大学附属小学校

| 分野 | 重点目標<br>(評価項目) | 年度計画(中期計画・中期目標)との関連性 | 具体的方策 | 成果指標・判断基準 | 自己評価 | | 学校関係者評価 | | 学校関係者評価を踏まえた改善策 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 達成状況, 改善策 | 評価 | 意見・理由 | 評価 | |
| 学校経営・安全管理等 | 9. 特別な支援を必要とする児童やいじめ防止への対応を積極的に行う。 | 生徒指導を改善し, いじめ防止を徹底する。 | ・特別支援教育委員の設置<br>・補助員による支援<br>・いじめ防止委員会およびケース会議での情報共有と対応検討 | ・特別支援教育委員のもとでの特別支援教育補助員の年間雇用時数:700時間以上<br>・いじめ防止委員会およびケース会議の開催:合計年間10回以上 | ・4名の特別支援教育補助員をこれまで時間雇用している(年間732時間)。<br>・いじめ防止委員会・教育相談委員会は定期的に月1回開催している(合計9回)。 | B | ・教科担の先生方と協力して, いじめの対策ができていることは有難い。<br>・今年度はいじめ等の大きなトラブルがないということは, 大きな成果がでている。<br>・個別支援の対応をしていることは, 安心であり有難い。<br>・いじめのヒヤリ・ハットを収集して, 全体を評価委員会に開示してほしい。<br>・特別支援の体制は, in person でないとできないものか, オンラインの活用はでき | B | ・いじめの認知に係る教職員の記録簿の改善を図るとともに, 校内連絡系統の周知・徹底によって, いじめの未然防止, 早期発見・早期対応に生かす。<br>・不登校児童に対する校内対応を明確にするとともに, 関係機関との連携・協力体制を構築する。<br>・特別支援サポート体制を充実させるため, 支援員の確保に努める。 |
| | 10. 教職員の労働時間を改善する。 | 「働き方改革」をふまえた学校経営を行う。 | ・定時退校日や積極的年休取得制度の設定 | ・定時退校日の設定:年間20日以上<br>・積極的年休取得制度による年休取得者の割合:100%<br>・残務時間:前年度比5%減 | ・定時退校日を月2回実施している。<br>・一人当たり平均10.9日(前年度は9.2日)の年休を取得している。年次取得者の割合は100%<br>・会議の効率化に向けた取り組み<br>・4月から12月までの残務時間平均が17.1時間(前年度は22.1時間)となっている。 | B | ・教職員の増加を希望する。<br>・なかなかAになりにくい項目だが, より積極的な具体的方策が必要である。<br>・少しでも多くの休みをとれるように, 業務のスリム化が進むとよい。<br>・様々な約束があり時間の使い方が問われている。 | B | ・業務内容に伴う勤務時間の実際に合致した精度の高い勤務シフト表を作成する。<br>・校内における会議等のひとつひとつに終了時刻を明示することによって, 働き方改革に対する意識の向上と業務の効率化を図る。 |

注) 太枠内は, 学校関係者評価委員会が記入する。